

2018年度 大学自己点検・評価(社会学研究科)自己点検・評価総括用シート 1

＜社会学研究科の教育研究目標の進捗状況＞

	教育研究目標(タイトル)	評価指標	評価尺度	進捗状況
目標1	研究方法や研究対象の専門分化にもとづきながら、それらを総合的に応用し、複雑化する現代社会を分析できる人材を育成する。	この教育目標は、研究科の教育のいわば方向性を示すものであり、その達成度を直接的かつ数量的に測定できる種類のものではない。むしろ、この教育目標を達成するための、さまざまな教育活動の向上を示す指標によって、代替すべきものである。		
目標2	論文執筆や外国語によるプレゼンテーションのための教育プログラムによって、国際的に通用する研究に貢献できる人材を育成する。	この教育目標は、その達成度を直接的かつ数量的に測定できる種類のものではない。むしろ、この教育目標を達成するための、さまざまな教育活動の向上を示す指標によって、代替すべきものである。		
目標3	博士学位(課程博士)取得に至るまでの段階・プロセスをモデル化するとともに、「博士学位キャンディデート」を授与することによって、博士学位(課程博士)の取得を促進する。	「博士学位キャンディデート」および博士学位(課程博士)の取得者数	A: 3名以上 B: 2名 C: 1名 D: 0名	2018年度目標値 B 2018年度自己点検・評価後(2018年度帳票提出時点) C

<2016～2018年度の自己点検・評価の取組み総括>

総括1 <3年間の取組みによって改善したこと、向上したこと>

社会学研究科では、社会学研究科ならではの多様な研究方法や研究対象の専門分化にもとづきながらも、それらを総合的に応用することで、複雑化する現代社会を適切な方法と手段によって分析できる人材を育成することを目標としてきた。2016年度から2018年度までの3年間においても、この目標に鑑みて、いくつかの顕著な成果が見られた。

その一つに、研究科全体の公式行事として、「研究成果発表会」を毎年度開催し、3年間にわたって常に50名以上が参加していることが挙げられる。また参加人数だけでなく、この「発表会」は、大学院生や研究員も協力して企画を行い、指導教員とは別の教員を成果発表のコメンテーターとして招くなどして、常に様々な角度から分析や考察を評価するための工夫を凝らすなど、研究科の上記目標に沿った運営がなされている点も特筆すべきことである。それに加えて、GSSP 事業の推進として「大学院生サポートプログラムセミナー」を3年間にわたって毎年10回以上開催し、大学院生の研究支援を常時行っていることも重要な取組みとして挙げられる。今後もこれらを継続的に行っていくことが課題であろう。

社会学研究科の研究教育目標としては、上記の他に、論文執筆や外国語によるプレゼンテーションのための教育によって、国際的に通用する研究に貢献できる人材の育成がある。この目標に関連して GSSP 事業の推進として外国の大学のセミナーに派遣する学生の割合を増やすことを計画してきた。この事業はオーストラリア国立大学との交流事業であったが、2016年度をもって終了したため、2017年度からは先端社会研究所との連携のもとメルボルン大学アジアインスティテュートとの交流事業となった。これらのプログラムの参加者割合は、25%(2016年度)、33%(2017年度)、37%(2018年度)と、予定より早く目標値を達成することができた。今後もある一定割合の大学院生がこのプログラムに参加することを通じて、国際的な研究へ貢献する人材育成という社会学研究科ならではの目標を達成することが課題である。

評価専門委員・所見記入欄:

■総括1について

- ・ 研究科内での様々な取組みが、2つの教育研究目標に対する成果として着実に結実していることがうかがえます。研究科としての理念・目的の達成に向けて、引き続き自律的・積極的に取り組まれることを期待しています。(B)
- ・ 「研究成果発表会」では、数的評価がなされているが、質的評価も重要である。質的評価をどうするかは難しい問題だが、検討課題であろう。(C)
- ・ 研究科の抱える課題について、種々の取組みによる成果が見え始めていることは評価できます。今後も継続して取組まれることが期待されます。(D)
- ・ 研究科の取組みとして、研究成果発表会・セミナーなど多くの方が関わりながら工夫をされ成果を出してこられたことが伺えます。今後の継続的な取組みに期待します。(E)
- ・ 評価指標の「質の確保と投稿者数」の評価尺度が人数となっています。これは投稿者数のことだと思いますが、そうすると「質の確保」の要素はどこにあるのでしょうか。質の確保の評価尺度は『KG 社会学批評』への採択率になるかと思しますので、投稿者数と採択率のデータが両方欲しいところです。(F)
- ・ 引き続き PDCA サイクルを機能させることで、更なる伸展が期待できます。(G)
- ・ 総括シートの行動計画で目標1および2で未達成となっている点の検証が望まれます(H)